

西郷隆盛

雲の巻

林房雄



西郷隆盛 第十卷

雲の巻

書名	著者	定価	発行所	発行者	発行日	印刷所	製本所	製函所
西郷隆盛 雲の巻	林 房雄	三八〇円	徳間書店 東京都港区芝新橋四の一〇	徳間康快	昭和四十年二月十五日 初刷	図書印刷株式会社	大口製本印刷株式会社	文京紙器株式会社

乱丁、落丁ありましたらおとりかえいたします

林 房雄©

林房雄

西郷隆盛

第十卷 雲の巻

雲の巻***目次

第一章 寵臣***9

第二章 浪士の書***19

第三章 三つ巴***32

第四章 密使***44

第五章 砂湯***67

第六章 死地の兵***79

第七章 大阪の宿***90

西
鄉
隆
盛
／
目
次

第八章 宇治の川風 * * * * 111

第九章 須磨の月 * * * * 138

第十章 勤皇道楽 * * * * 149

第十一章 山川港 * * * * 157

第十二章 露と消えにし * * * * 171

第十三章 徳之島 * * * * 181

第十四章 山上の風 * * * * 189

第十五章 茶と米 * * * * 199

年表 * * * * 214

挿絵・山崎百々雄／装幀・上口睦人

雲

の

卷

第一章 寵 臣

鼓川の重富屋敷では、内輪ながら盛大な祝いが行われていた。主の久光がいよいよ国父の資格で二の丸に入城する。永年仕えた家来や召使の者に金品や記念品の品々を分け、別盃を賜わるめでたい送別の宴であった。

二の丸入城は、久光にとっては、中央政界への進出の準備である。重富家から島津本家に復籍することは、無位官ながら、大薩藩の実権者たることを天下に公示することである。住みなれた屋敷ではあったが、べつに心残りはなかった。家臣たちのやや大袈裟な喜びやら惜別の言葉やらを聞き流しながら盃の数をかさね、久光は陶然と酔っていた。

庭では梅が盛りであった。今年の梅は冬の寒さが特にきびしかったために、花期はおくれたが、それだけ色香がすぐれている。月なみな感懐であるが、久光にはそれが意味深いことのように思われて、梅花一輪を盃に浮かせて賞美した。

中山尚之介がかたわらに侍して、酒の相手をしながら、さっきから何か言いたげな素振りである。

久光は挨拶の家臣たちの姿がちょっと途絶えたすきを見て、

「尚之介、どうした？」

とふりかえった。

「はい、昨夜、大島三右衛門こと西郷吉之助に会いましたが……」

「おお、そのことか」

久光は盃をおいて立上り、「尚之介、庭を歩こう」

うしろにひかえた前髪の小姓が気をきかせて庭下駄のある方に駆け出そうとするのを、尚之介は目でおさえて、

「お供は無用だ」

御内談だという意味を語尾にひびかせて、久光につづいて庭に下りた。

魚紋を浮かべた池の水に、連翹れんぎょうの花がふくらみ始めた蒼つばきを映している。風のない早春の午後の日ざしが密談には明るすぎた。

久光は左手を懐に入れた酔後の漫步といった姿で、築山の陰を茶室のある方に歩きながら、振り返らずに、

「西郷が何を申したか。……どんな男だ？」

尚之介は小走りに駆けよって、

「さっぱり話のわからぬ男でございます」

「ふうむ」

「島から帰って来たばかりで、何も知らぬくせに傲慢な独断ばかり申立てます。何を思い上ってか、まるでわれわれを子供扱いにし、こっちの意見は聞こうとも致しませぬ。……一言で申せば、彼の意

見は島津左衛門一派と同じ御出発延期論であります」

久光は立止って、

「延期論を吐いたか。それはおかしい。彼は突出論の元兇ではなかったのか。過激な言動を看板にして、若侍や浪士の人気を集めている男ではなかったのか」

「私もそう思っておりますが、あつてみると案外な自重論で……と申すよりも、なりあきら斉彬公の御遺策を笠に着て、他人の立てた計画を片っぱしからたたきこわそうという無法な態度が鼻につきます。わが藩の内治外交に関して、斉彬公の遺策を継承しているのは自分一人だといったげな大きな顔をしています」

「ふうむ」

久光の眉がびくりと動く。中山尚之介は久光の急所にふれたのである。久光は斉彬の遺策の継承者が自分以外にあると聞くと、かならず不機嫌になる。島津左衛門との衝突も、結局それが原因であった。西郷吉之助が「斉彬の遺策の継承者」をもって自任しているかぎり、久光との正面衝突は免れ得ない、と中山は見当をつけている。

前庭の方から太鼓の音が聞えて来た。何か催し物でもはじまるらしい。家来や女中たちは笑いさざめきながら、その方に集って行った。

久光は老梅の樹かげの庭石に腰をおろし、

「西郷とやらが今さら異議を申し立てても、もはや間に合うことではあるまい」と、独り言のようにつぶやいた。

「私もそう思いました」

中山は獲たりとばかり引取って、「独りよがりの反論は聞くだけ無駄だと思いましたので、昨夜は中途でさっさと引揚げてまいりました」

久光は聞きとがめて、

「余は聞かずとも、おまえは聞いておくべきではなかったか」

しまった、余計なことを言ったと中山は思った。久光は用心深い周到な性格の持主である。頑固ではあるが、軽率ではない。人の忠言にも一応は虚心に耳を傾ける。

「はい、私は最後まで聞くつもりでおりましたが、あまりの暴言を聞くに堪えず、それにほかにやむを得ぬ所用もありましたので、中座したのであります」

中山は出まかせの弁解をした。「あとに小松と大久保の兩人が残っていましたから、くわしいことは兩人にお聞き下さればわかりましょう」

「小松は今朝早くやって来た」

「ほう」

「小松は西郷の人物について、おまえとはだいぶちがう意見を述べていた。余にぜひ一度あえと申した。おまえはどう思う？」

帯刀に先まわりされた以上、余計なことを言わぬのが賢明だ、と中山はすばやく判断した。あうなといえ、久光はかえってあうだろう。名君をもつて任じている君主は、側近の者に動かされていると意識することを極度に嫌う。主人に動かされているような顔をしながら、主人を動かすのが謀臣の

道である。

「おあいになって、殿の御眼力によって、当人の人物を鑑別なされるのが何よりと存じます」

この返事は久光の氣に入った様子であった。

「明日、あおう。二の丸に入った後では手続きが面倒だ。……西郷吉之助の旧職は何であったかな」

「はあ、徒目付^{かめつけ}お庭方兼役であったかと存じます」

「その職に復して、明日、この屋敷に召連れてまいれ」

「はっ、かしこまりましたでござります」

*

翌日の午後、吉之助は大久保に伴われて重富屋敷に出頭し、久光に拝謁した。

久光は吉之助の挨拶を受けながら、なるほど大男だなと思った。小山がゆるぎ出たという感じがそのまま当てはまる。身のこなしは鈍重であるが、異常に大きく、異常に鋭い目の光はただ者でない。といっても、奸佞^{かんねい}とか詭激^{きげき}とかいいう感じとは遠い。まず実直で円満な風采をそなえているというべきであろう。べつに変った男でもなさそうだというのが、久光の最初の印象であった。

だが、いよいよ久光の質問に答えて意見を述べはじめると、この印象は次第にくずれて来た。上体をまっすぐに起し、久光の顔を正面から見つめながら、ゆっくりと物をいう態度は圧倒的であった。といつても傲慢無礼ともいえない。つまり、この男の身にそなわっている自然な力量感なのであると解釈して、久光はその点は氣にしなかった。ただ言うことがあまりにまっすぐすぎて、人に腹を立

てさせかねないところはたしかにある男だ。

意見の内容は、久光がすでに小松帶刀から聞いたのと同じであつた。上京出兵が準備不足であり、時期尚早である所以をはばかりる色なく述べ立てて、

「さようの次第でありますれば、御参府は恐れながら御延期をお願い致します。このように申してはいかがかと存じまするが、江戸及び京都の事情は先公斉彬様の御当時とは、よほどちがつている模様であります。あなた様は斉彬様とはちがい、江戸の様子は御存じあらせられず、幕閣の諸人物、列藩の諸侯との御交際もございませぬ故、よほどの準備を整えられた上でなければ、御大策の実行はおぼつかないかと考えまする」

なるほど相当な言い方をする奴だ。思い上っているのか、氣負ひ立っているのか、それとも自信を裏づける真の経綸を胸中に秘めているのか。どちらにせよ、ここで腹を立てては自分の負けだ。もつと言いたいことを言わせてみよう、と久光は自分をおさえ、おだやかな口調でたずねた。

「なるほど、余は江戸を知らぬ。だが、余の準備がそれほど不足におまえには思えるか」

「わが藩一個と致しますれば、相当の御準備と拝察致します。だが、天下を相手に致すのにはなお不足であります」

「わが藩が天下を相手にするのだ。わが藩一個の準備が充分なら、それでいいではないか」

「御大策決行のためには、ぜひ大藩の諸侯と御相談なさる必要があります」

「何を相談するのだ」

「雄藩連衡の相談であります。雄藩の連合を実現して、然る後に京都に上り、勅諭を奉戴したならば、

事はかならず成功するでありましょうが、わが藩の独力をたのみ、功をいそぎ、勅命を笠に着て、諸藩に号令しようなどと考えたら、いたずらに天下の反感と嫉視（あきら）を買い、事はかならず破れまする」

「……………」

「また、勅命をいただきましたとしても、ただ幕府に勅使を差し立てられるだけでは実現はおぼつかないと存じます。あなた様自ら大兵をひきい、勅使を奉じて江戸に乗り込むことが必要であります。その間の京都の警備は同論の大藩に全部まかせるだけの度量が要ります。江戸と京都を同時に引受けるだけの實力はまだわが藩にはありません。無理にやっては、兵を労するだけでなく、天下の反感を買います。薩摩一藩が勤皇の功を一手に占むるがごとき疑いを起す行動は極力避けなければなりません」

「京都は他藩にまかせてもよいというのか」

「さようでございます。安心してまかせるだけの準備をしておけばよろしいのであります。あなた様自らは勅使を警護して江戸に乗り込み、勅使が將軍家に勅諭を下すと同時に登城、勅諭の即行を幕閣に迫る。これだけの用意と決心がなければ水戸の二の舞いで、幕閣の老獪な遷延策に引っかかり、天下の物笑いとなるばかりであります」

（相当なことを申す、だが、そのくらいの決意が自分にできていないとこの男は見ているのか）

と、久光は思った。（自分の計画は一朝一夕のものではない。正しく言えば兄斉彬以来の練りに練った大策だ。有志家を気取る下士どもの思い上った書生論によって批評さるべきものではない。聞きおくだけで結構であろう）